

令和8年度 郷土の歴史講座 第1回学習会資料 令和8年6月28日(日)

奥会津の道シリーズその1

下 野 街 道

奥 会 津 博 物 館
文 化 財 専 門 員
渡 部 康 人

●道について

- ①道は、けもの道→石器材料運搬道(黒曜石・碧玉・青虎石等)→国家統治のための公共財。
- ②江戸時代の道路政策では、人や物の移動の自由を厳しく制限。関所＝番所を設置し管理。
- ③峠道は、荷車が通行できないような構造(幕府は、武器等の大量輸送を懸念か)。
- ④運送→江戸時代＝人が背負う。牛馬の背中に荷物を付ける。明治時代＝荷車や馬車。
- ⑤道を示す用語も多い。街道 間道 径路 峠 一里山＝一里塚 舟渡し
- ⑥近世初期、街道には駅所(新編会津風土記)＝宿場＝宿が整備された。
- ⑦駅所は、周辺に散居していたいくつかの集落を街道沿いに強制移住させ成立させた。
- ⑧駅所には、大名等が宿泊する本陣(茶屋)、それを補う脇本陣、荷物の中継を行う問屋、旅人が宿泊する旅籠が設置された。
- ⑨道路が設置される場所は、山際(根岸)、沢沿い、川沿い、稜線等。
- ⑩また、最短で繋ぐために直線的なライン。
- ⑪寛文11年(1671)『会津風土記』では「坂東道」が採用(『日本国語大辞典』1里＝6町・690m)。
- ⑫文化6年(1809)『新編会津風土記』の凡例に、
「一里と云うは三十六町なり、一町は六十間、一間は六尺三寸なり」
1間＝6尺3寸(約1.91m) 1町＝60間(約115m) 1里＝36町(約4140m)

目 次

プロローグ

●奥会津について 奥会津は、ほぼ南山御蔵入と同一地域

●奥会津の道調査の最高の史料「図書」(ず・しょ＝絵図をまとめた書物)について

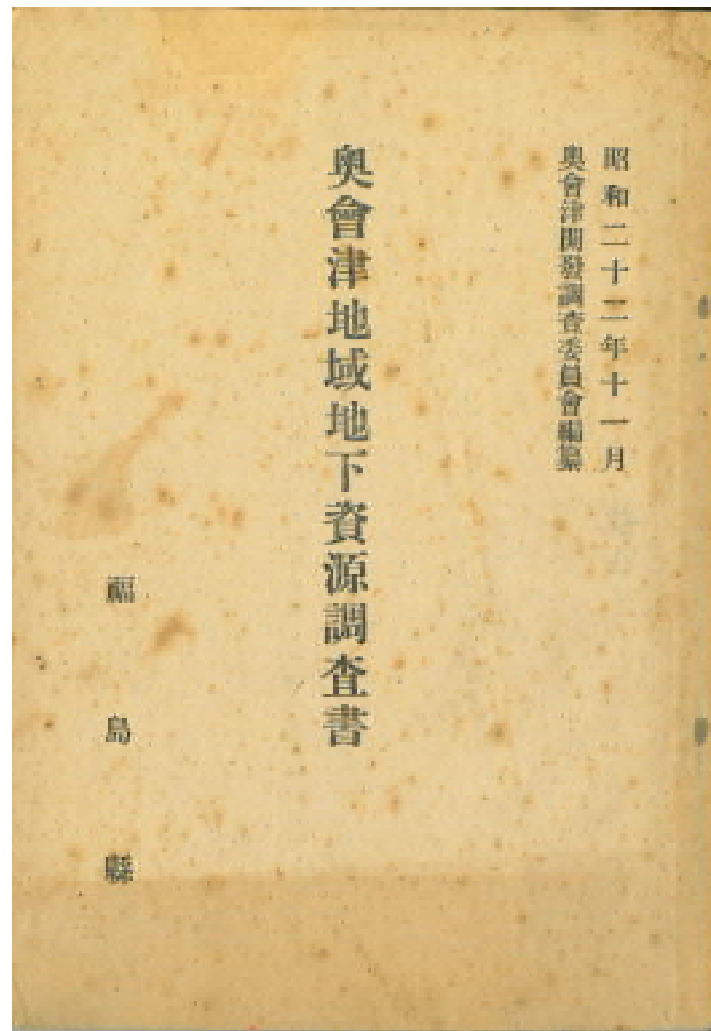
1、下野街道の概要

2、『新編会津風土記』から見る下野街道

3、日光大地震による下野街道の途絶

4、まとめ

プロローグ



「奥会津」という地域名称を確認できる最古級の資料



南山御蔵入郷・組割図

南山御蔵入の概要

- 江戸幕府3代将軍・家光は、寛永20年(1643) 会津藩主・加藤明成と重臣・堀主水(ほり・もんど)との確執が深刻化したことを問題視。明成から会津藩40万石を没収した(『徳川実紀』)。
- 家光は、それまで一体として支配してきた会津を南北に分割した。北部23万石を、自身の異母兄弟で山形藩主の保科正之に与え会津藩とした(『家世実紀』)。
- 南部の山岳地帯＝南山(みなみのやま)5万石は、南山御蔵入(江戸幕府の直轄地＝徴収された年貢は、すべて将軍の財布に入る領地)にした。この支配の構図は幕末まで継続する(『家世実紀』会津藩の信頼度の高い歴史書)。
- 将軍は、南山御蔵入の支配を度々会津藩に任せていた。会津藩は戊辰戦争の頃も南山御蔵入を江戸幕府に代わって支配していた。
- 南山御蔵入には行政区域として6郷、19組、271村が存在した。
- 「郷」の代表者はいない。「組」の代表者を「郷頭」(ごうがしら)、村の代表者を「名主」(なぬし)と呼称した。
- 会津藩は、この「郷」「組」を基に「図書」を作成した。



会津藩が戊辰戦争に備え作成した絵図帳「図書」(ずしょ)

「図書」には、作成年、作成者についての記述はない。ただ、内容を見ると会津藩が戊辰戦争に備え、南山御蔵入及び周辺地域の道や中世城郭等を詳細に調査し、絵図帳にしたと考えられる。

道は官軍の侵攻するルートを事前に予測、中世城郭は軍事施設として利用するために「図書」に記録したのである。

「図書」1巻に目録があるので一覧にして示す。

しかし、残念なことに「図書」1巻の最後に以下のように記されている。

図書中の五、七、八は、戊辰の役に紛失す、
落書は薩摩藩士の悪ずらなり、
不足図は薩摩藩士の破却せんものなり、

「図書」の5・7・8巻は戊辰戦争時に紛失したとある。これは地理不案内の官軍が持ち去った可能性がある。

現在、1・3・4・6・9・10巻は福島県立博物館、2巻は会津武家屋敷が所蔵している。

奥会津の道が詳細に記録「図書」巻別区域図



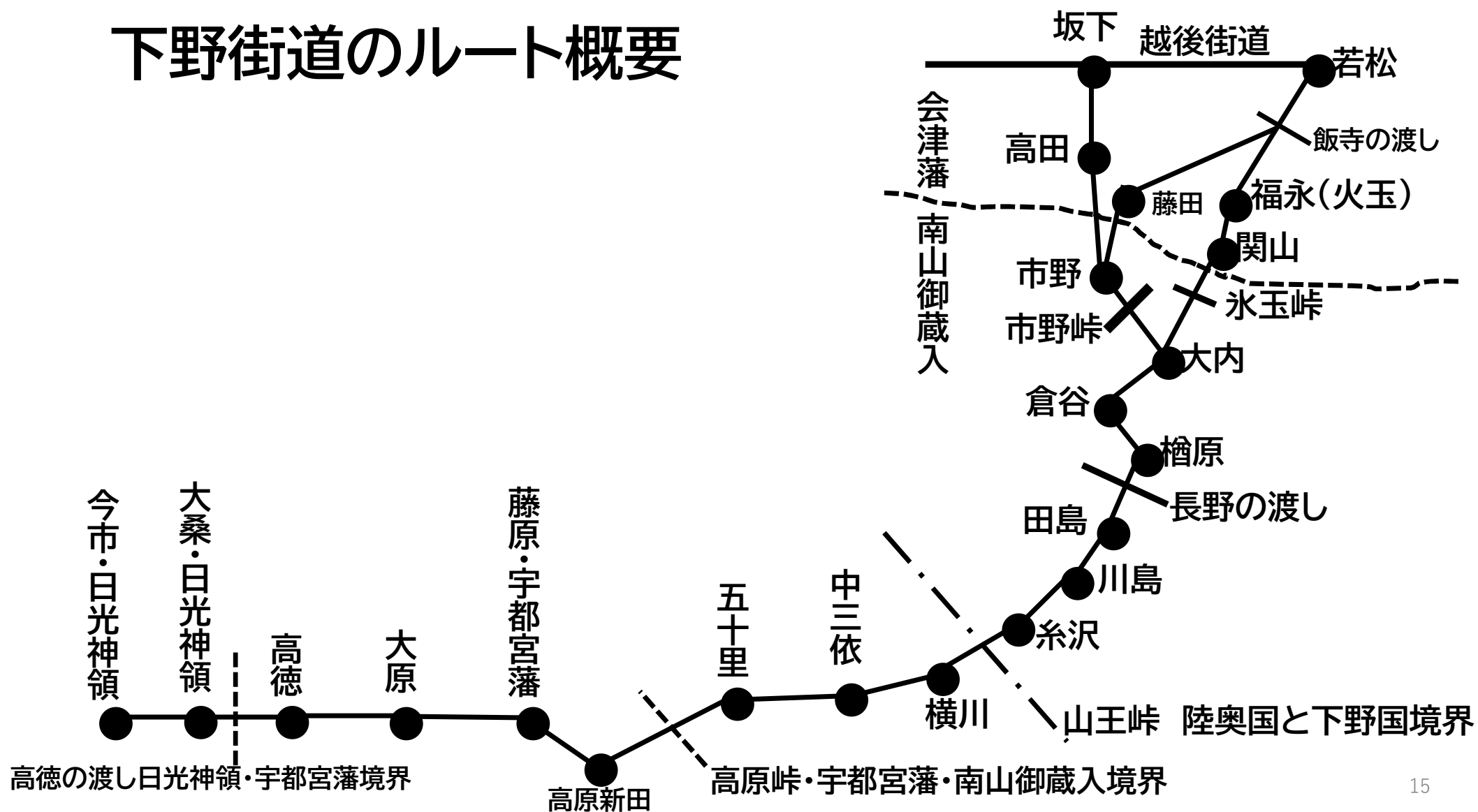
「図書」 巻別の内容一覧

巻数	内 容
1 巻	上郷之部 田島組(南会津郡南会津町田島地域田島地区) 高野組(南会津町田島地域桧沢地区)
2 巻	上郷之部 川島組(南会津町田島地域荒海地区・日光市三依地区) 熨斗戸組(南会津町館岩地域)
3 巻	下郷之部 檜原組(南会津郡下郷町の一部) 小出組(下郷町の一部・会津若松市のごく一部)
4 巻	下郷之部 弥五島組・松川組(いずれも下郷町の一部)
5 巻	伊南・伊北谷之部 大塩組(南会津郡只見町の一部・大沼郡金山町の一部) 黒谷組(只見町一部)
6 巻	伊南・伊北谷之部 和泉田組(南会津町南郷地域の一部・只見町の一部) 古町組(南会津郡檜枝岐村・南会津町伊南地域・同町南郷地域の一部)
7 巻	金山谷之部 瀧谷組(大沼郡三島町の一部・河沼郡柳津町の一部) 大谷組(大沼郡三島町の一部・河沼郡柳津町の一部)
8 巻	金山谷之部 野尻組(大沼郡昭和村) 大石組(大沼郡金山町の一部)
9 巻	尾岐郷之部 東尾岐組(大沼郡会津美里町高田地域の一部) 永井野組(大沼郡会津美里町高田地域の一部) 冑組(大沼郡会津美里町高田地域の一部)
10 巻	安積五ヶ郷之部(会津若松市の一部・郡山市湖南地域の一部)

1、下野街道の概要

- ①下野街道は、陸奥国会津と下野国日光神領・今市をつなぐ道。
会津藩領→南山御蔵入領→宇都宮藩領→日光御神領
- ②大内(会津盆地と南部の山岳地帯の結節点)までは、3ルート
 - 越後街道坂下で分岐→高田→市野→大内
 - 若松→藤田→市野→大内
 - 若松→福永→関山→大内
- ③天和3年(1683)9月に発生した日光大地震により、五十里付近の戸板山が山体崩壊。
これにより、五十里川がせき止められ、下野街道が水没。
元禄8年(1695)宇都宮街道が整備される。享保8年(1723)五十里のせき止め湖決壊。

下野街道のルート概要



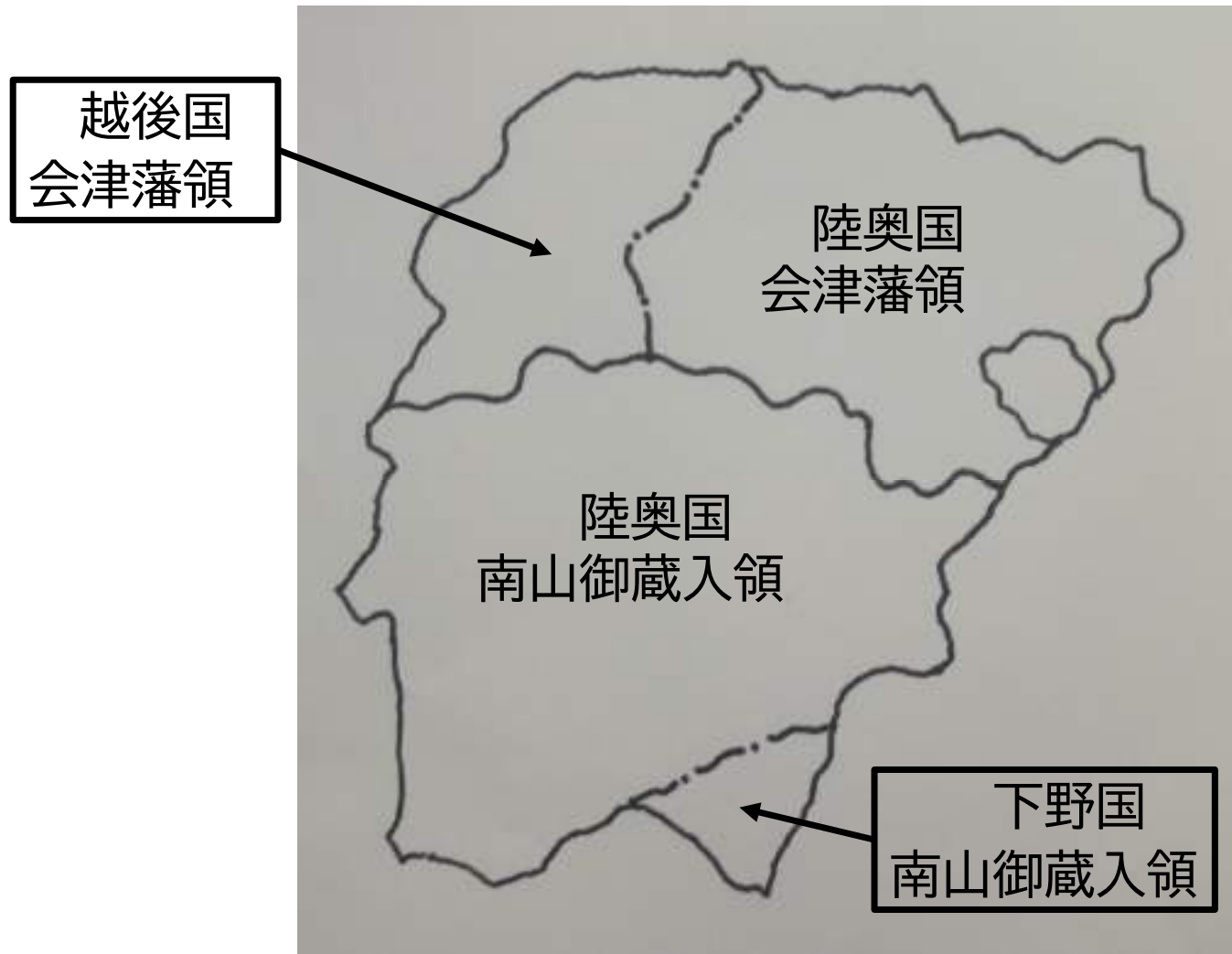
2、『新編会津風土記』から見る下野街道

①『新編会津風土記』は、幕府からの命を受けた会津藩が享和3年(1803)から編さんに着手。

②文化6年(1809)に全120冊の書として完成し幕府に献上された。

③内容は、会津藩領、当時幕府から会津藩が「預り支配」を命じられていた、南山御蔵入領、魚沼御蔵入領の界域・山・川・橋・温泉・街道・峠・神社仏閣・村名や家数等が組単位で記されている。

会津藩領と南山御蔵入領の位置図



大沼郡大塩組

新発田藩界

黒川藩界

米沢藩界

信天郡界

守山藩界

白川藩界

小出組界

下条組

津川町

上条組

海道組

鹿瀬組

吉田組

木曾組

大谷組

坂下組

牛沢組

高田組

高田組飛地

永井野組界

瀧谷組界

五目組

小田付組

慶徳組

小荒井組

熊倉組

塩川組

笠川組

高久組

若松

滝沢組

南青木組

橋爪組

中荒井組

代田組

川西組

川東組

猪苗代湖

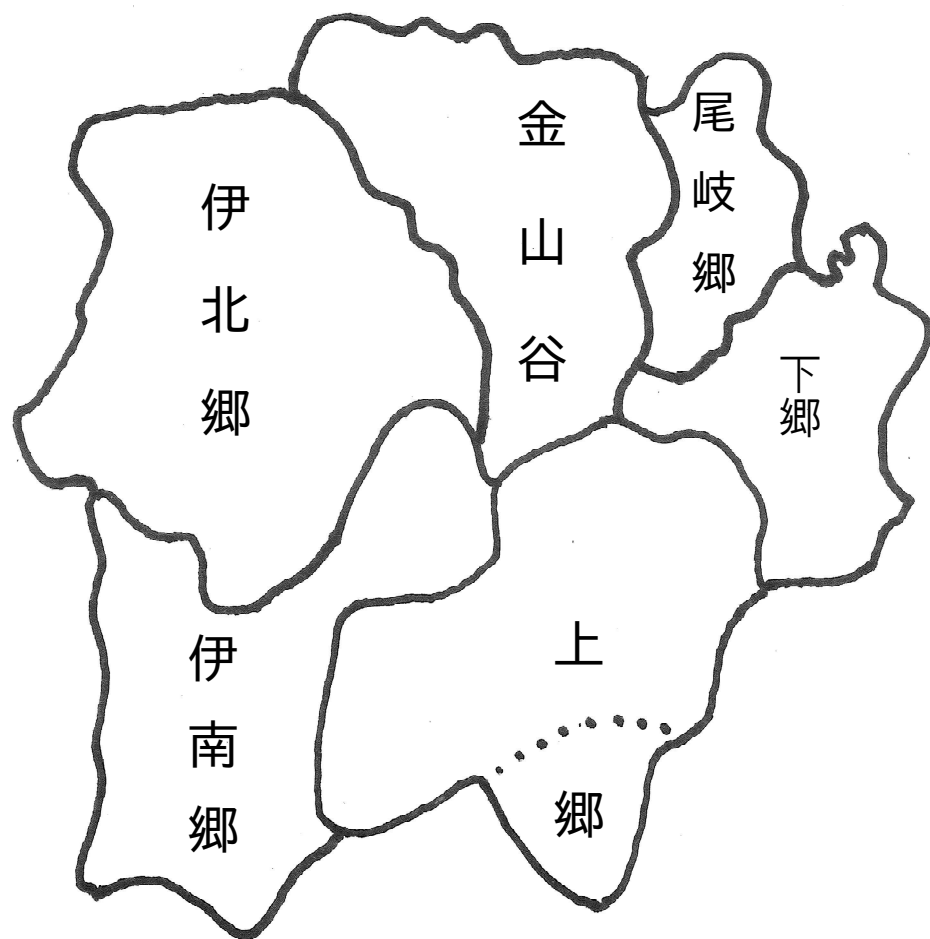
原組

福良組

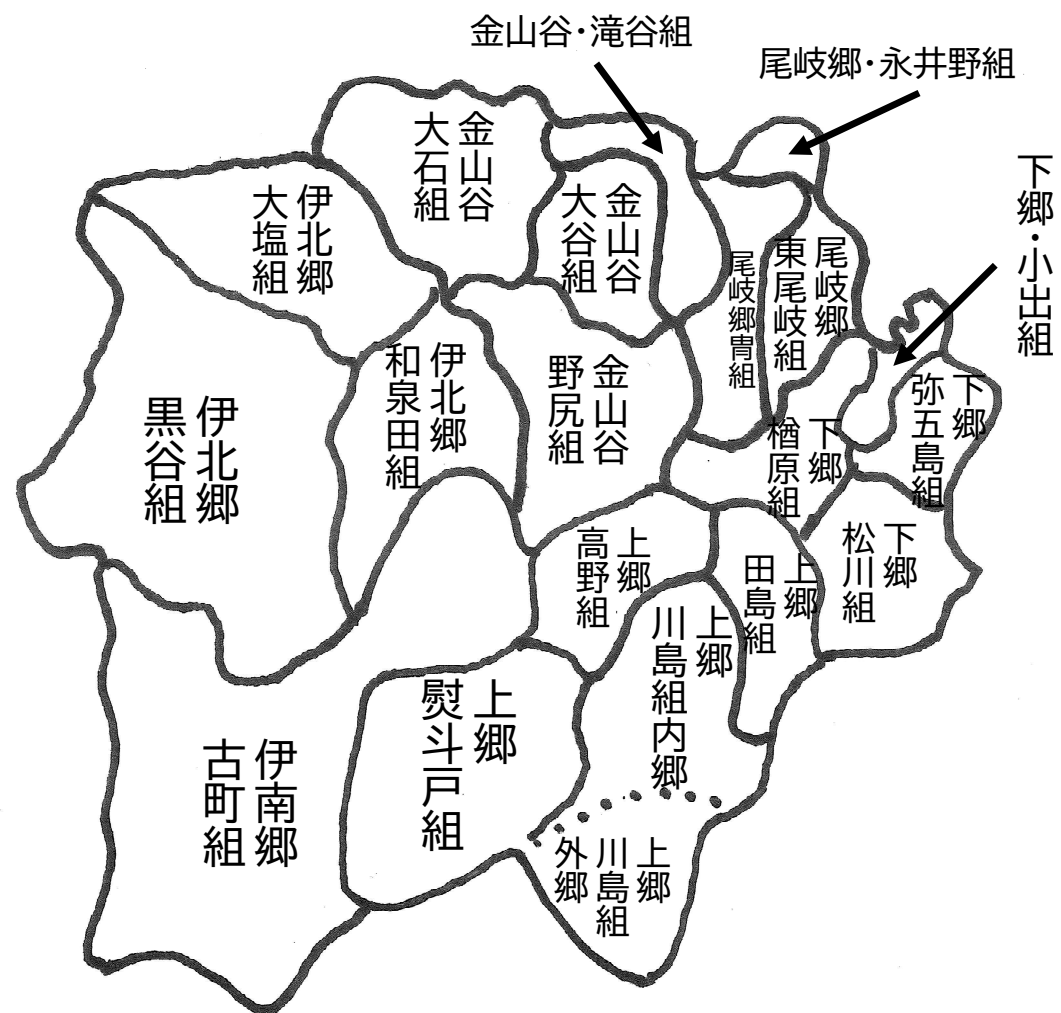
大石組界

年8月、奥会津博物館作製

18



南山御蔵入郷割図



南 山 御 蔵 入 組 割 図

●下野街道の起点(出典:『新編会津風土記』卷之十五要約)

- ・大町＝この地は若松城下の中央に位置し、四民輻輳

(しみん・ふくそう＝四方から寄せ集まること)の所である。

- ・一ノ町と七日町に分岐点に、制札がかかげられていた。
- ・よってこの街を「札辻」という。
- ・四方の街道は、この場所が起点になる。
- ・東は白河街道、西は越後街道、南を下野街道、北を二本松街道という。

大町の辻↓七日町↓桂林寺町↓赤井丁↓横丁通↓

材木町↓飯寺

出典：本郷町教育委員会『下野街道(南山通り)』
大正改訂版「最新若松市地図」会津若松市
デジタルライブラリーから引用



●下野街道福永までの道

- ①飯寺(にいでら)村 『新編会津風土記』卷之34 『新編会津風土記』第2巻152p

下野および伊北・金山郷に通る街道にて路二筋あり、下飯寺より南に行くを下野街道とし、西に行くを金山道とす、村中に一里塚あり、

- ②宗頤(そうえん)町 船渡場『新編会津風土記』卷之31 『新編会津風土記』第2巻92p

村東にて鶴沼川を渡す、下野国に通る街道なり、冬月は橋を架す、

- ③上米塚村 『新編会津風土記』卷之31 『新編会津風土記』第2巻91p

村中に下野街道あり、

- ④上米塚村の端村・出新田 『新編会津風土記』卷之31 『新編会津風土記』第2巻92p

村中に下野街道あり、

- ⑤大八郷村 『新編会津風土記』卷之72 『新編会津風土記』第3巻333p

下野街道を挟む



●近世初頭、下野街道は南山通と呼称

南山通、御荷物上り候を、

其地にておろし候儀、

迷惑之由聞届候、

向後八火玉迄、当町之者

通シ候様にと申付候間、

可得其意者也、

(慶長六年(一六〇一)から十八年(一六一三)の間)
十二月十九日

岡半兵衛尉重政(花押)

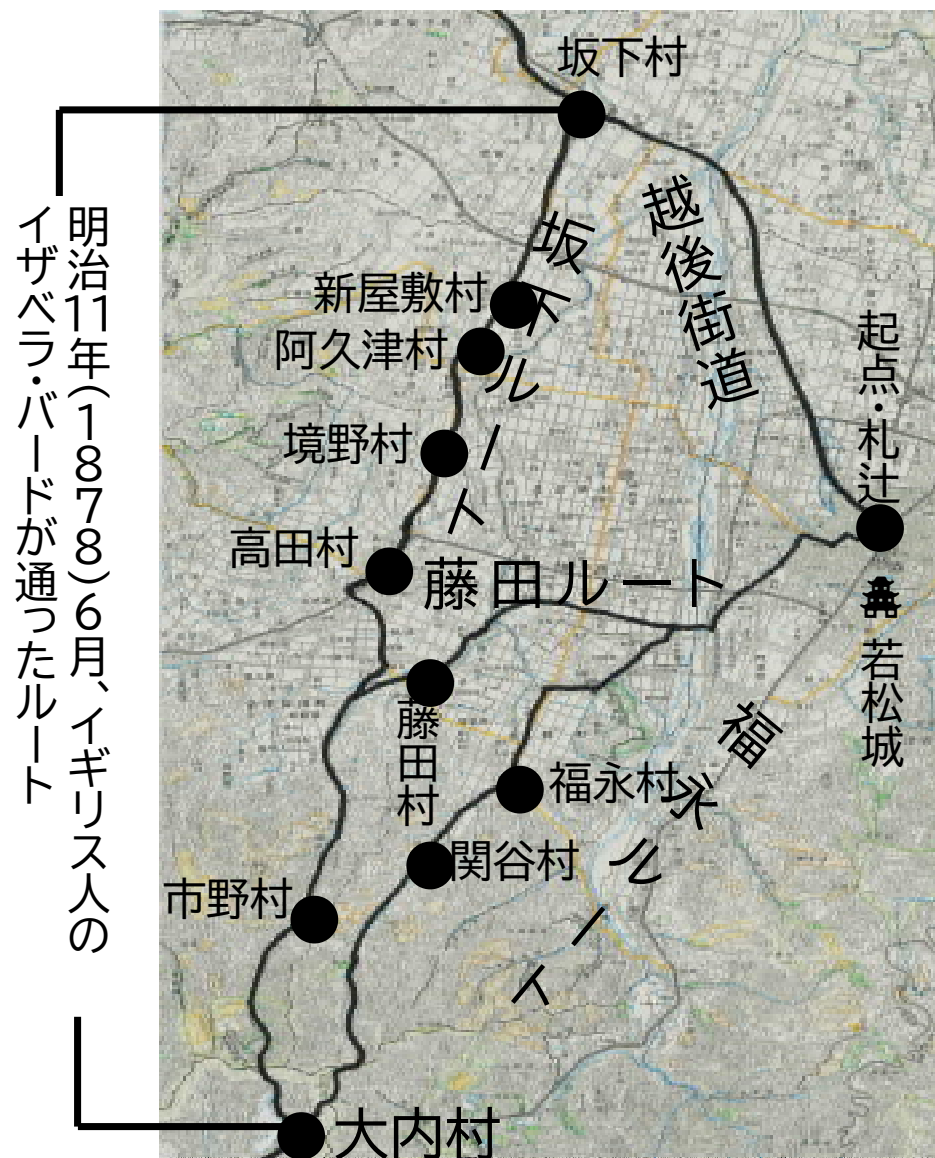
町野左近助繁口(花押)

本郷町肝煎中

新編会津風土記巻之72 本郷村の条

- ①本書は蒲生秀行の家臣が、本郷町の肝煎衆に宛てたもの。
- ②内容から、本郷町の肝煎衆から南山通の宿駅を返上したいとの願いが出され、
本書はその願いに対する回答である。
- ③おそらく、本郷町では宿駅の業務(荷物の中継、馬や人の確保)が相当負担になって
いたため、宿駅の返上を願い出たと考えられる。
- ④蒲生秀行は、本郷町肝煎からの願いを聞き届け、火玉(福永)を宿駅にすると伝えている。
- ⑤下野街道の街道名や宿駅の変遷を知ることが出来る貴重な史料である。

『新編会津風土記』にある下野街道3ルート図



●下野街道の駅所(大内まで福永ルート)

①福永村(陸奥国大沼郡橋爪組・会津美里町本郷地域)『新編会津風土記』卷之七十二

・昔は火玉村と云う。加藤嘉明が火の字を忌て、寛永4年(1627)福永に村名を変えた。

下野街道の駅所である。

②関山村(陸奥国大沼郡橋爪組・会津美里町本郷地域)

『新編会津風土記』卷之七十二

・関山村はもと福永村の端村であった。

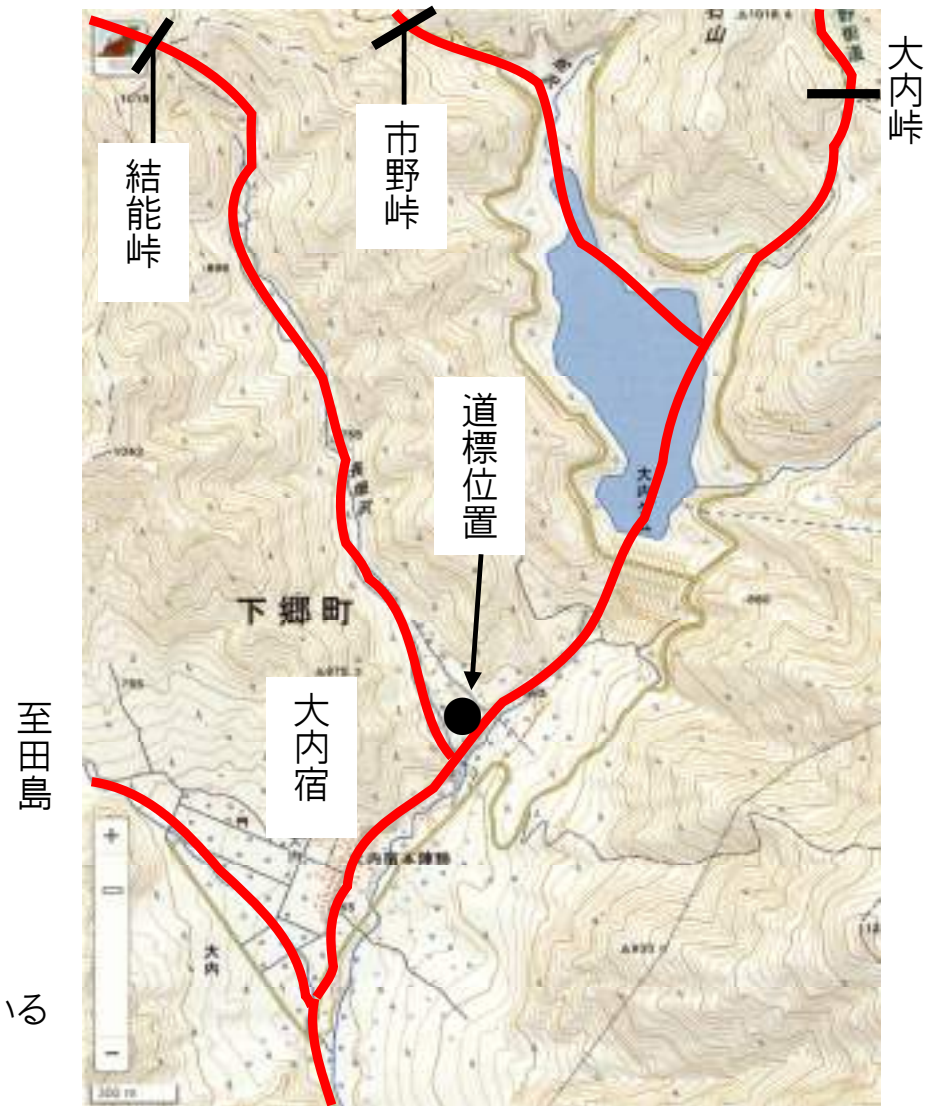
・古戸(ふると)・須美沢(すみさわ)と称して、散居していた。

・寛永18年(1641)、散居していた古戸(ふると)・須美沢(すみさわ)を移住させて下野街道の駅所とする。

・正保3年(1646)、福永村から独立して、関山村となる。



下野街道大内宿と結能峠道との追分の道標 左柳津 右若松と刻されている



『新編会津風土記』にある下野街道3ルート図



●下野街道のルート(大内まで坂下ルート)

①坂下村(陸奥国河沼郡坂下組・河沼郡会津坂下町)『新編会津風土記』卷之九十

▪村中に越後より下野に通る街道あり。2里30丁40間大沼郡高田組高田駅に継ぐ。

②新屋敷村(陸奥国大沼郡高田組・大沼郡会津美里町新鶴地域)

『新編会津風土記』卷之七十五

▪この村、下野街道にて、村南に一里塚あり。

③阿久津村(陸奥国大沼郡高田組・大沼郡会津美里町新鶴地域)

『新編会津風土記』卷之七十五

▪この村、越後国より下野国に通る道なり。

●下野街道のルート(大内まで坂下ルートの続き)

④境野村(陸奥国大沼郡高田組・大沼郡会津美里町新鶴地域)

『新編会津風土記』卷之七十五

・下野街道に住す。

⑤高田村(陸奥国大沼郡高田組・大沼郡会津美里町高田地域)

『新編会津風土記』卷之七十五

・越後国より下野国に通る駅所にて、ここより2里1町30間で東尾岐組市野駅に継ぐ。

⑥市野村(陸奥国大沼郡東尾岐組・大沼郡会津美里町高田地域)

『新編会津風土記』卷之七十八

・下野街道駅所にて、会津郡檜原組大内村に継ぐ。



下野街道 市野宿 大内方面から坂下方面を見る

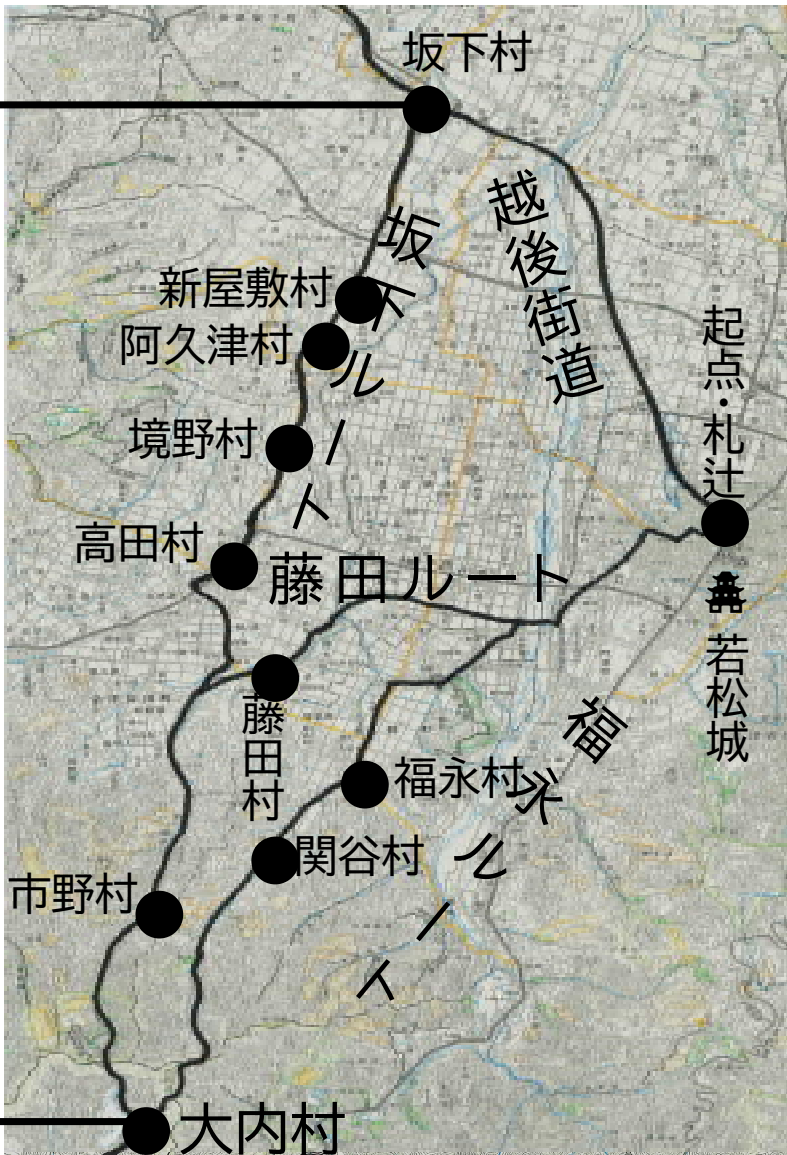
●明治11年(1878)6月から9月にかけて、東京から北海道まで旅行したイギリス人、イザベラ・バードは、大内から市野・高田を通り、坂下に至り新潟に向かった。

彼女の著書『日本奥地紀行』(平凡社『東洋文庫』240 1973年初版)から紹介する。

- 私は大内村の農家に泊った。
 - それから雄大な市川峠(市野峠)をのぼった。
 - 市川(市野)という村に入った。
 - 金色の立派な仏寺が見えてきたので、かなり重要な町に近づいて来た事がわかった。
- 高田はまさにそのような町である。
- 坂下に着いたのは6時であった。ここは人口5千人の商業の町である。

『新編会津風土記』にある下野街道3ルート図

明治11年(1878)6月、イギリス人の
イザベラ・バードが通ったルート



●下野街道のルート(藤田ルート)

①藤田村(陸奥国大沼郡橋爪組・大沼郡会津美里町高田地域)

『新編会津風土記』卷之七十二

- この村下野に通る裏街道にて、慶安元年(1648)より駅所とす。
- 府下(若松)よりここに継ぎ、ここより1里15町54間市野駅に継ぐ。

②札辻から藤田村までのルートは、『新編会津風土記』には、記されていない。





下野裏街道 藤田宿 市野宿方面を見る

●櫛原村
陸奥国会津郡櫛原組
家数72軒
下野街道の駅所なり
『新編会津風土記』巻之38



●大内村
陸奥国会津郡櫛原組
家数46軒
下野街道の駅所なり
『新編会津風土記』巻之38

●倉谷村
陸奥国会津郡櫛原組
家数26軒
下野街道の駅所なり
『新編会津風土記』巻之38



水 抜 の 道 標



右 若松 柳津道
左 戸石郷道

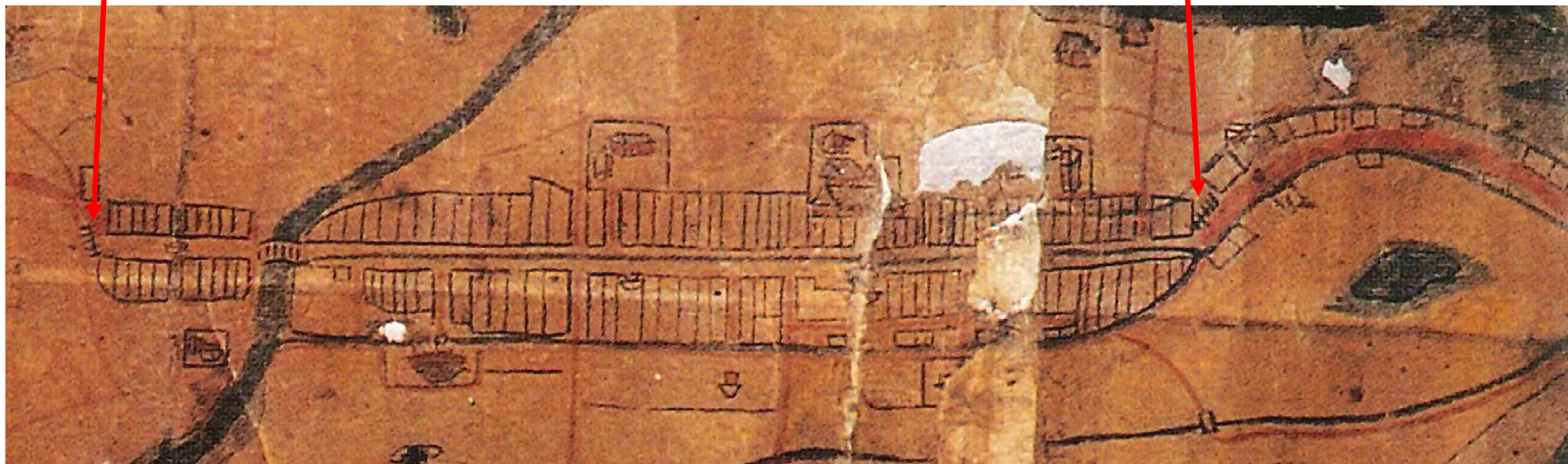




江戸時代の初めに描かれたと考えられる田島宿絵図

木戸

木戸



街道沿いに直角に屋敷地が配置されている。この絵図が描かれた時点で、田島宿は成立している。街道の中央やや北側に水路が描かれている。この屋敷割がベースとなり、御党屋組が組織された。現在の西町付近には、沼があったことが分かる。

豊臣秀吉、田島の法花寺に宿泊の可能性

- 秀吉は、天正18年(1590)8月4日宇都宮を発ち、会津に向う。
- 白河を経由し、勢至堂峠を通り9日に黒川(若松の古名)に入る。
- 興徳寺を宿舎に、東北地方の大名の配置を行う。
- 8月13日に黒川を発ち、宇都宮に向う。
- その経路は、黒川から下野街道を南下したと考えられ、13日は田島に宿泊した可能性がある。
- 薬師寺住職のお話によれば、田島の法花寺に宿泊したとの言い伝えがあるとのこと。

法花寺の跡地に寛政の田島陣屋が建設された。

●糸沢村 陸奥国会津郡川島組
家数53軒 下野街道の駅所なり。
『新編会津風土記』巻之40

●中三依村 下野国塩谷郡川島組
家数48軒 下野街道の駅所なり
『新編会津風土記』巻之120



田島村

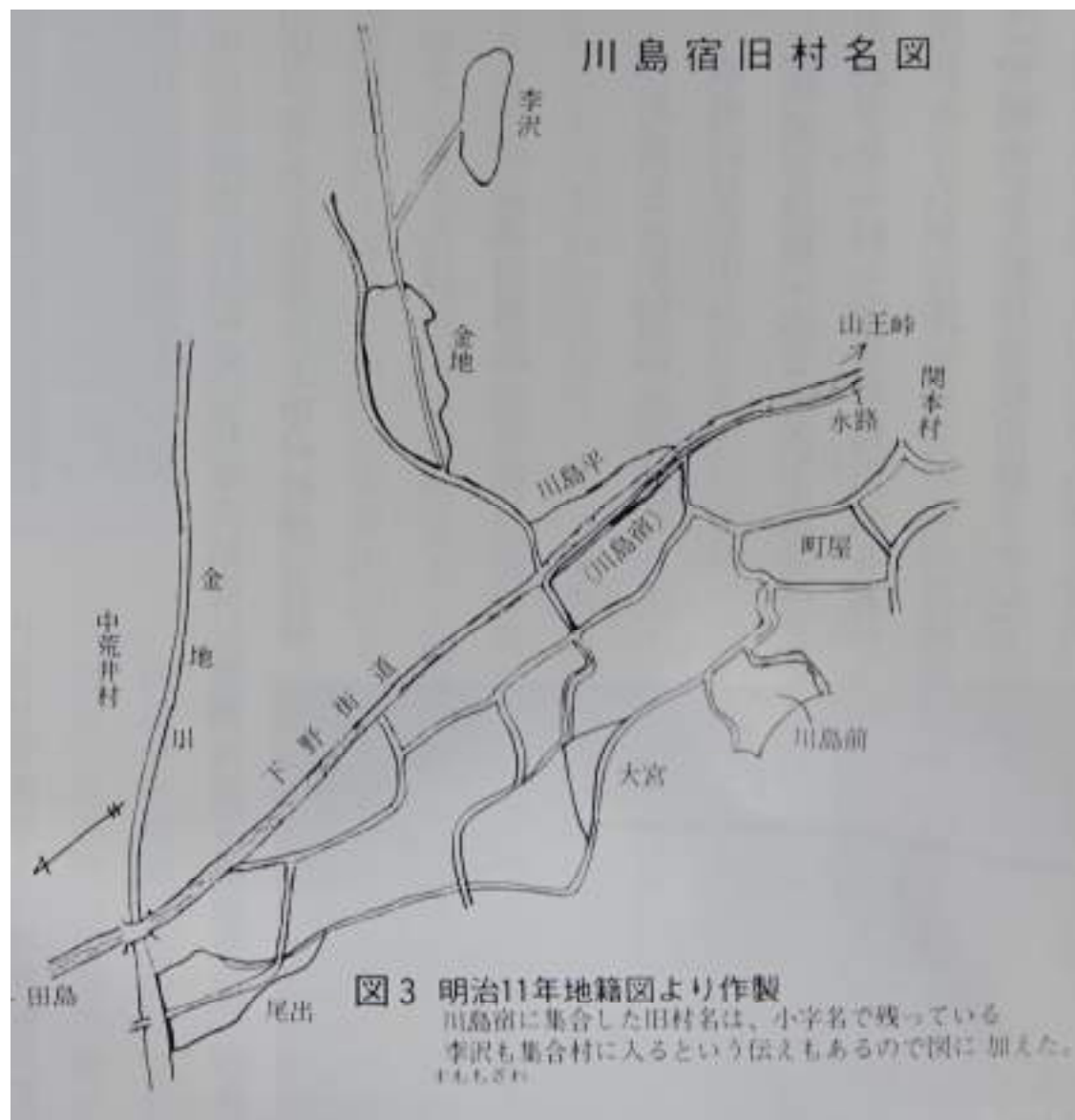
●川島村 陸奥国会津郡川島組
家数58軒 下野街道の駅所なり。
『新編会津風土記』巻之40

中世の川島は、町屋村、大宮村、尾出村、川島村、
金地村の5か村であった。寛永14年(1637)に
町屋村に駅所が設置された。明暦元年(1655)
に5か村が移住させられ、川島宿が成立した。
(渡部一郎著『中奥街道の仲間旅者』)

山王峠

●横川村 下野国塩谷郡川島組
家数32軒 下野街道の駅所なり
『新編会津風土記』巻之120

●横川口(番所)
村中にあり。木戸門を設く。番戌(ばんじゅ)を
置き下野街道の往来を察せしむ。旧糸沢村
に置く。寛文元年(1661)ここに移す。



出典:『下野街道』



川島本陣 出典:『下野街道』

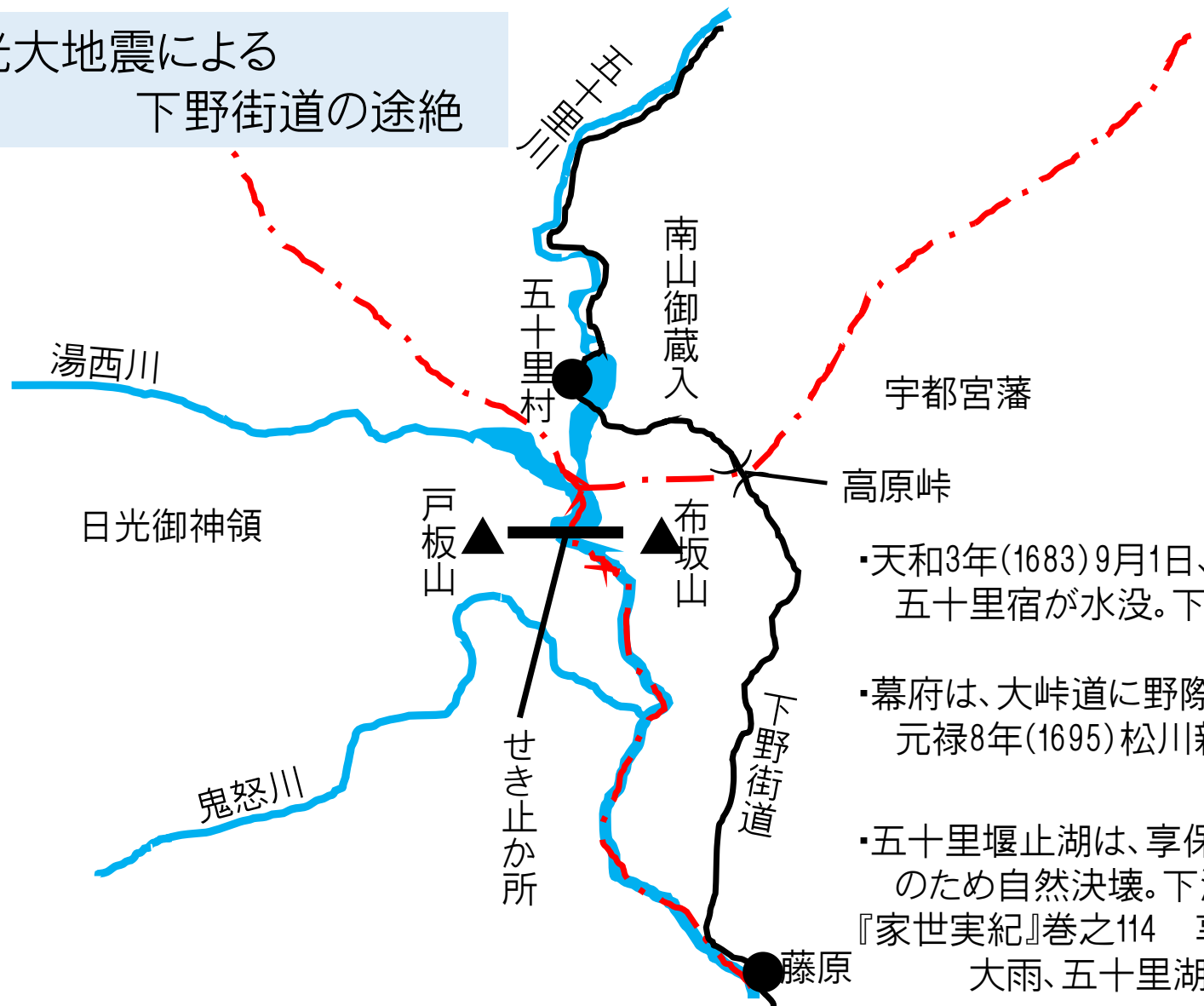


下野街道 横川の一里塚



現在も残る下野街道 日光市上三依

3 日光大地震による 下野街道の途絶



- ・天和3年(1683)9月1日、日光大地震発生。
五十里宿が水没。下野街道の通行に深刻な影響。
- ・幕府は、大峠道に野際新田宿、三斗小屋宿を新設。
元禄8年(1695)松川新道開通。若松→氏家
- ・五十里堰止湖は、享保8年(1723)8月、大雨
のため自然決壊。下流大被害。
『家世実紀』巻之114 享保8年8月10日条
大雨、五十里湖満水、水抜け

●日光大地震について

出典:『家世実紀卷之六十三』天和3年(1683)9月1日の条 『会津藩家世実紀』第4巻85p

「九月朔日、日光御領戸板山地震にて崩れ、御預所五十里川突留新湖出来」

要約

- ①五十里川は、五十里村分高原峠の続き、布坂山と日光御領川治村分の戸板山の間を流れている。
- ②今暁丑の刻(午前1時から午前3時までの2時間)、日光山大地震が発生した。
- ③当年5月に発生した地震よりも、はるかに強く、お城の石垣は崩れ、石塔も倒れた。
- ④戸石山は山体崩壊し崩れた岩は布坂山へ押し寄せた。
- ⑤岩は川に沿って四百拾間(約746m)ほど、高さは十式三丈(約40m)にもなった。
- ⑥大きな石、大木が夥しく落ち重なり、五十里川をせき止めた。
- ⑦せき止められた水によって、五十里村は水没し、一里(周圀)ほどの湖水になった。
- ⑧五十里村は31軒。水難を避けるため中井という場所に小屋を造り引っ越した。





下野街道五十里宿の現在の様子



日光大地震によって岩雪崩が発生した戸板山



伝高木六左衛門の墓

この布板山は別に、腹切り山ともよばれています。
天和三(一六八三)年、日光大地震によって
葛老山の一部が崩壊し、男鹿川をせき止めて
周囲三十余キロメートルの湖ができました。
これにより、会津西街道の交通は遮断され、
会津地方からの年貢米の輸送等の大きな
障害となりました。そこで会津藩は、藩士の
高木六左衛門に堀割の工事を命じ、湖水の
切り落としを図りました。しかし、工事は
厚い岩盤にはばまれて難航し、完成しなかった
のです。そのため、高木六左衛門は、責任を取って、
この場所を刎腹自害したと伝えられています。
四十年後の享保八(一七二三)年八月
この湖は決壊し、その水勢は下流に甚大な
被害を及ぼしました。これが歴史に有名な
五十里洪水です。

日光市
五十里自治会



下野街道

●五十里村 下野国塩谷郡川島組
家数30軒 下野街道の駅所なり
『新編会津風土記』巻之120

五十里村(南山御蔵入)



川治村(日光御神領)

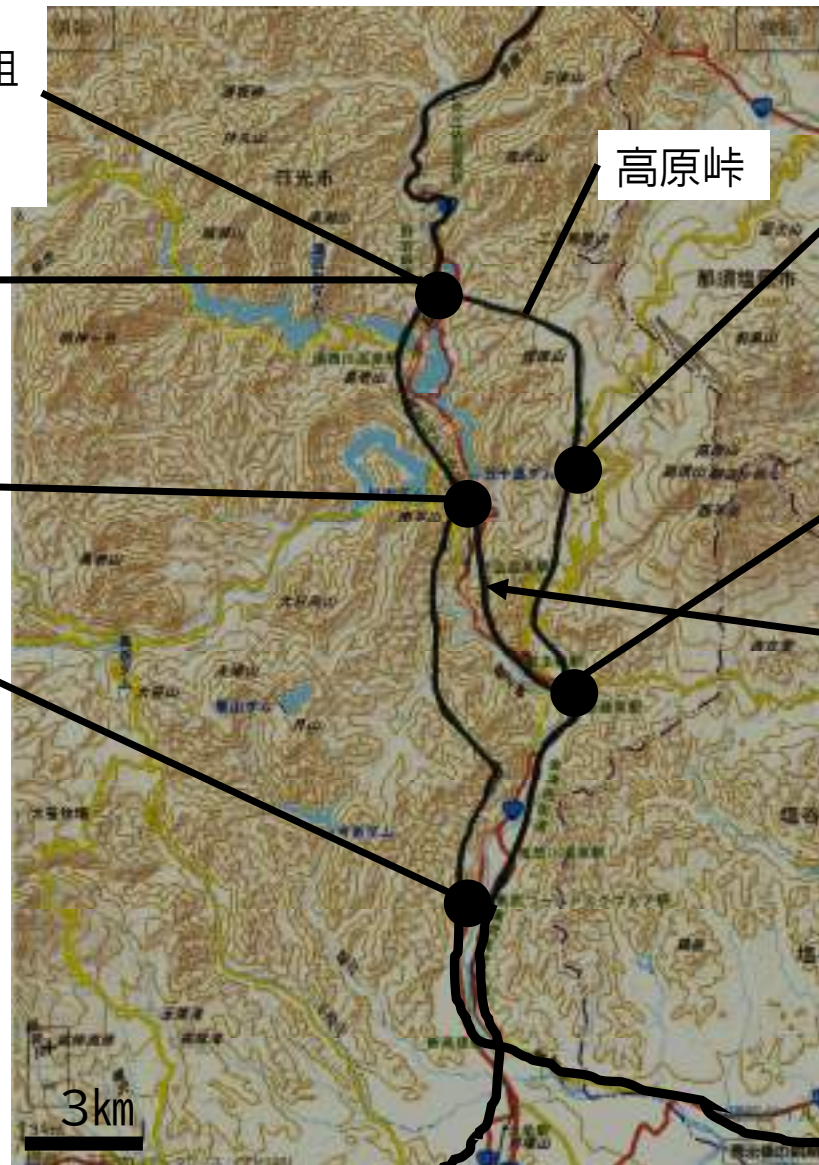


小佐越村(日光御神領)



小佐越新道

天保から嘉永年間に
南山御蔵入の商人が
中心となり鬼怒川の右
岸に建設。



高原峠

下野街道

●高原新田村(宇都宮藩領)
栃久保新道開通に伴い
文久3年(1863)廃宿

下野街道

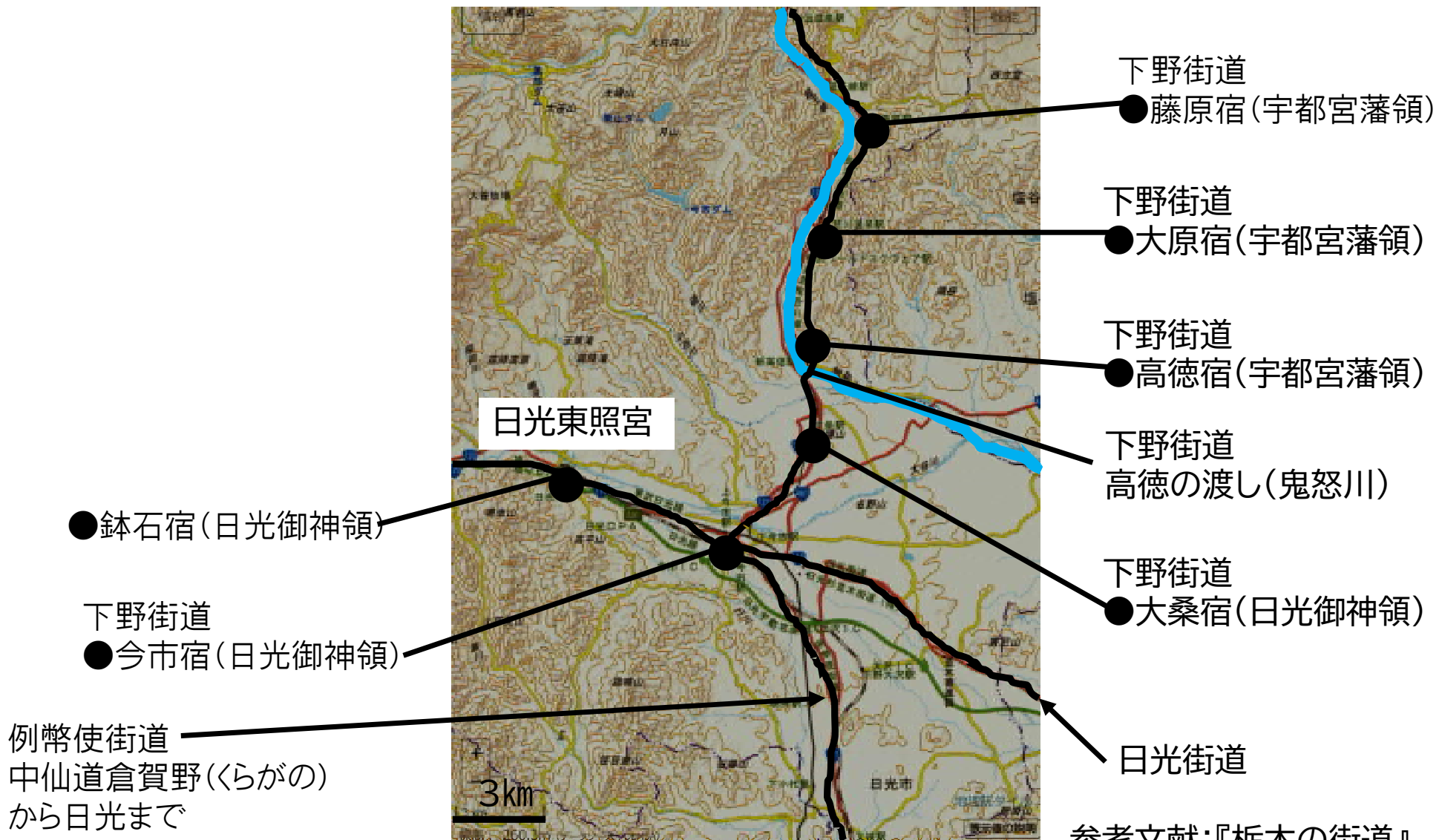
●藤原村(宇都宮藩領)

栃久保新道

下野街道の最大の難所であった
五十里・藤原までを、高原新田
村を通らず、鬼怒川の左岸を
川治から藤原に至る。

参考文献

『藤原町史』通史編・資料編
『栃木の街道』



延宝6年(1677)会津藩主・保科正経南山通り經由江戸行の行程
出典:『家世実紀』巻之51

	月・日	お昼	現 在 地	泊り	現在地	備 考
1	4月9日 若松出発	大内	下郷町	田島	南会津町	家臣から饅頭・御肴届く
2	4月10日	横川	日光市	五十里	日光市	
3	4月11日	大原	日光市	大原	日光市	鬼怒川洪水のため逗留
4	4月12日			今市	日光市	
5	4月13日	楡木	鹿沼市	小山	小山市	枝柿一箱届く
6	4月14日	栗橋	埼玉県北葛飾郡栗橋町	粕壁	春日部市	御菓子届く
7	4月15日	草加	草加市			家臣から御菓子が届く 江戸三田屋敷に到着

江戸には、6泊7日で到着している。宿には近隣の大名や家臣から、様々な進物が届けられる。通常は5泊6日。

まとめ

①下野街道は、大内宿までは3ルート。

越後街道坂下宿→高田宿→市野宿→大内宿

若松→福永宿→関谷宿→大内宿

下野裏街道 若松→藤田宿→大内宿

②大内宿は、会津盆地と南山(会津盆地の南部の山岳地帯)との結節点に当たるので、多くの峠道が収束する(桧和田峠道・結能峠道・市野峠道・氷玉峠道)。

③天和3年(1683)9月1日に発生した日光大地震により、戸板山が山体崩壊し、五十里川がせき止められ、五十里宿が水没。

④これによって、下野街道は通行不能となり、各宿場では人の移動や物流が止まり、死活問題になる。

⑤この現状を重く見た江戸幕府は、若松から氏家に至る宇都宮街道(以前からこの峠道は存在)を元禄8年(1695)整備し本街道にした。

⑥五十里せき止め湖は、大雨のため満水となり、享保8年(1723)8月水抜け。下流域大被害。